EXPO 2025大阪・関西万博｜知性が揺さぶられるパビリオン5選

いのちが問いかける？ イタリアのクリエイティブ集団が選んだ、「大人が行くべきパビリオン5選」

By Wakapedia　公開日:2025/08/07

Best Pavillions

Esquire Japan

jump to:

- 第1位　イタリア館
- 第2位：オーストリア館
- 第3位　ウーマンズ パビリオン（in collaboration with Cartier）
- 第4位　シグネチャーパビリオン「いのちの未来」（英：Signature Pavilion – The Future of Life）
- 第5位　ウズベキスタン館

2025年4月13日に開幕（10月13日閉幕）、大阪湾の人工島・夢洲を舞台に、「大阪・関西万博2025」が絶賛開催中だ。日本での万博開催は2005年の「愛・地球博（愛知万博）」以来、実に20年ぶり。そして大阪では、1970年の伝説的な「人類の進歩と調和」万博以来、なんと55年ぶり。

1970年は月面着陸、新幹線の高速化、カラーテレビの普及、人工衛星の打ち上げなど「進歩」がキーワードの、科学と技術こそが未来を切り拓くと、誰もが信じて疑わなかった時代。しかし、21世紀に入り、気候変動や格差、パンデミックなどの「いのち」そのものが危機にさらされる時代に突入し、私たちの関心は「どれだけ先に進めるか」から「どう共に生き、どんな未来を築くか」へとシフトしている。

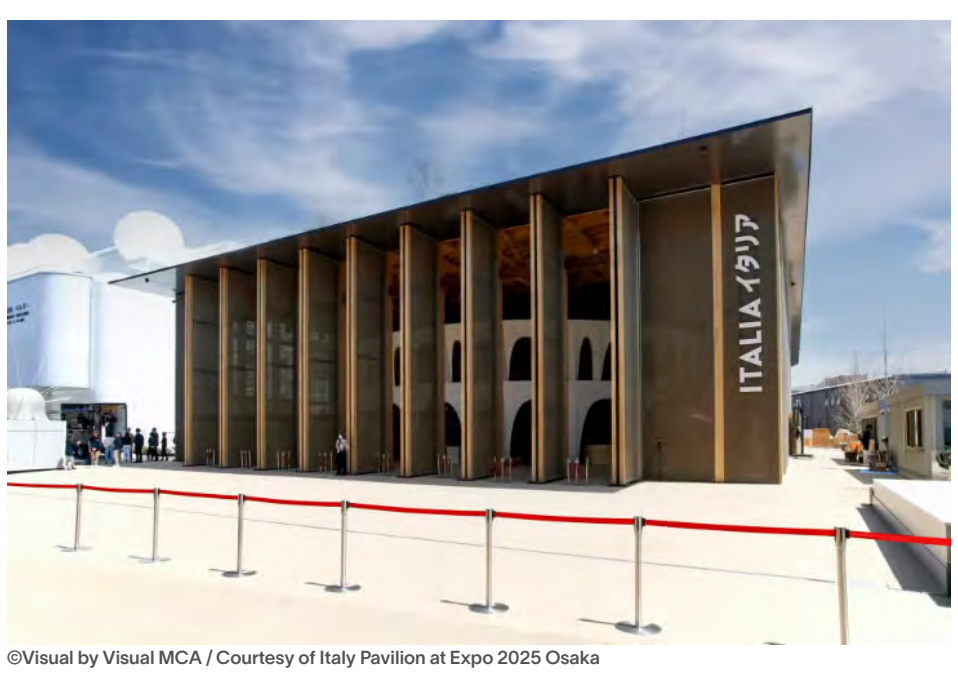
そんな今を映し出すように、今回の万博が掲げたテーマは 「いのち輝く未来社会のデザイン」。単なるテクノロジーの展示ではなく、「私たちは何を大切にして生きていくのか」を改めて見つめ直す場であり、各国のパビリオンは、未来への問いを静かに、時に大胆に、私たちに差し出してくる。

会場には、現代建築好きの間でも話題沸騰中の全長約2kmの木造建築「大屋根リング」（設計：藤本壮介氏）をはじめとし、世界各国の個性豊かなパビリオンが勢ぞろい。とはいえ、**2015年開催のミラノ万博**も経験済みの我々に言わせてみれば、ゴシップもまた万博の魅力のひとつ！　建設トラブルや未払い問題、高額すぎるグルメ（イギリス館は中でもその最高峰。味も価格も本国の通りに忠実に再現したとか？！）、さらに万博後に控えるカジノ開発の話題がSNSをざわつかせている。それすらも「あるある」として味わうのが真の万博ファンなのだ。

でも今回は、そんな裏話を脇に置いて厳選した「考えさせられる」ハイカルチャーなパビリオンベスト5をご紹介。インスタ映えだけじゃない、 あなたの中にある未来観が揺さぶられる展示に、きっと出会えるはず！

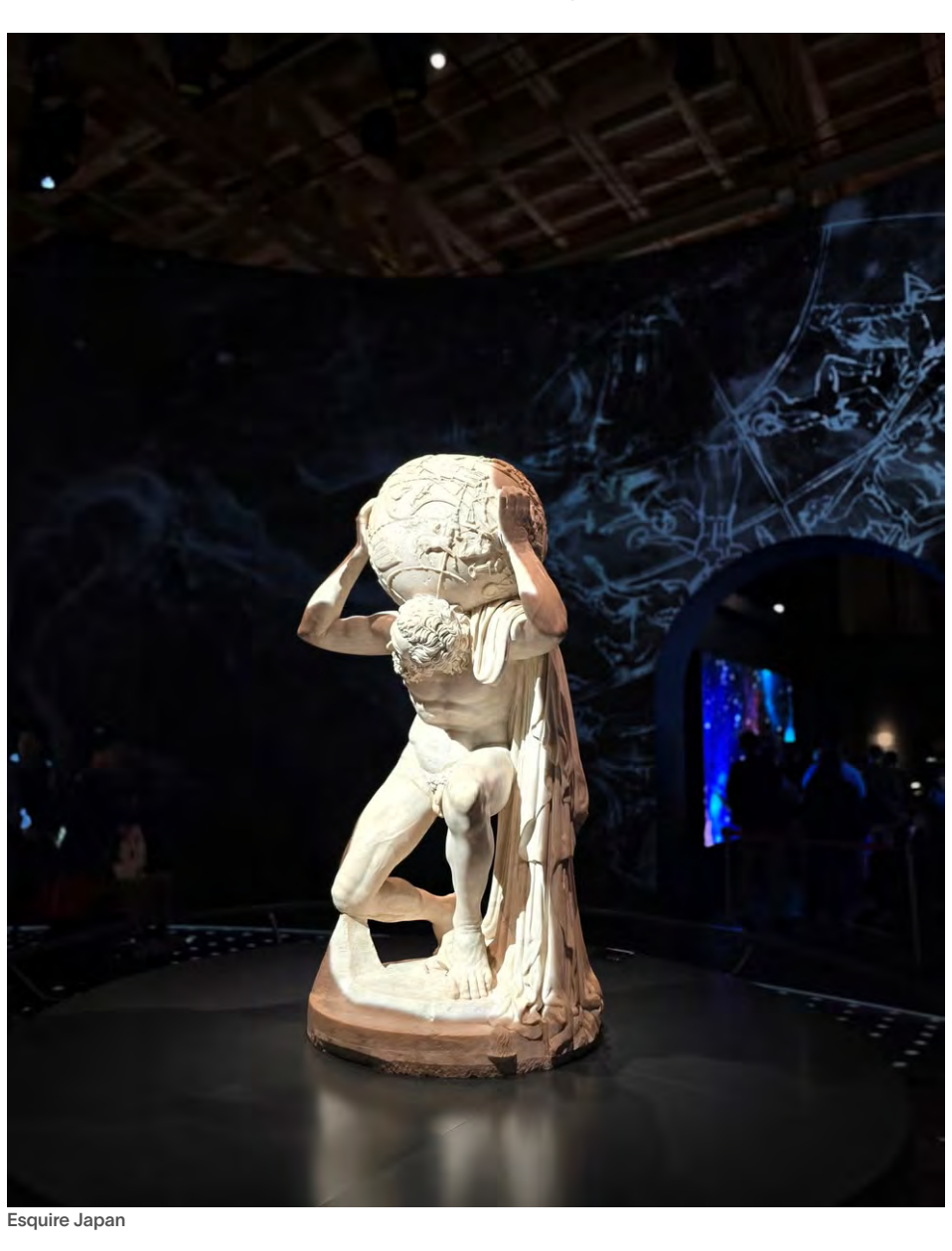
第1位　イタリア館

体感型・芸術フルコース。並ぶことすらリアル芸術の一環？！



©Visual by Visual MCA / Courtesy of Italy Pavilion at Expo 2025 Osaka

イタリア館は、「芸術がいのちを再生する（L'Arte Rigenera la Vita）」をテーマに、建築・芸術・食・音楽が丸ごと融合した「体感型イタリア」そのもの。建築はマリオ・クチネッラ・アーキテクツによる設計で、ルネサンス時代の「理想都市」を現代的に再構築。広場も劇場も庭園も取り込んだ構造は、まるで都市ごと夢洲にダウンロードしてしまったかのよう。館内では、バチカンが他国パビリオンに史上初めて貸し出したカラヴァッジョやミケランジェロの傑作が並び、レオナルド・ダ・ヴィンチの手稿やアトラス像、1920年にローマ〜東京間を渡った伝説の複葉機の骨格展示まで、イタリアが誇る芸術と科学のレジェンドたちが総出演。



Esquire Japan

展示を堪能したあとは、テラス付きレストランで地方料理を味わい、劇場では突如始まるオペラやライブ演出も楽しめる。まさに、五感すべてを満たす「イタリア式フルコース」。

Esquire Japan

再現された飛行機の骨格

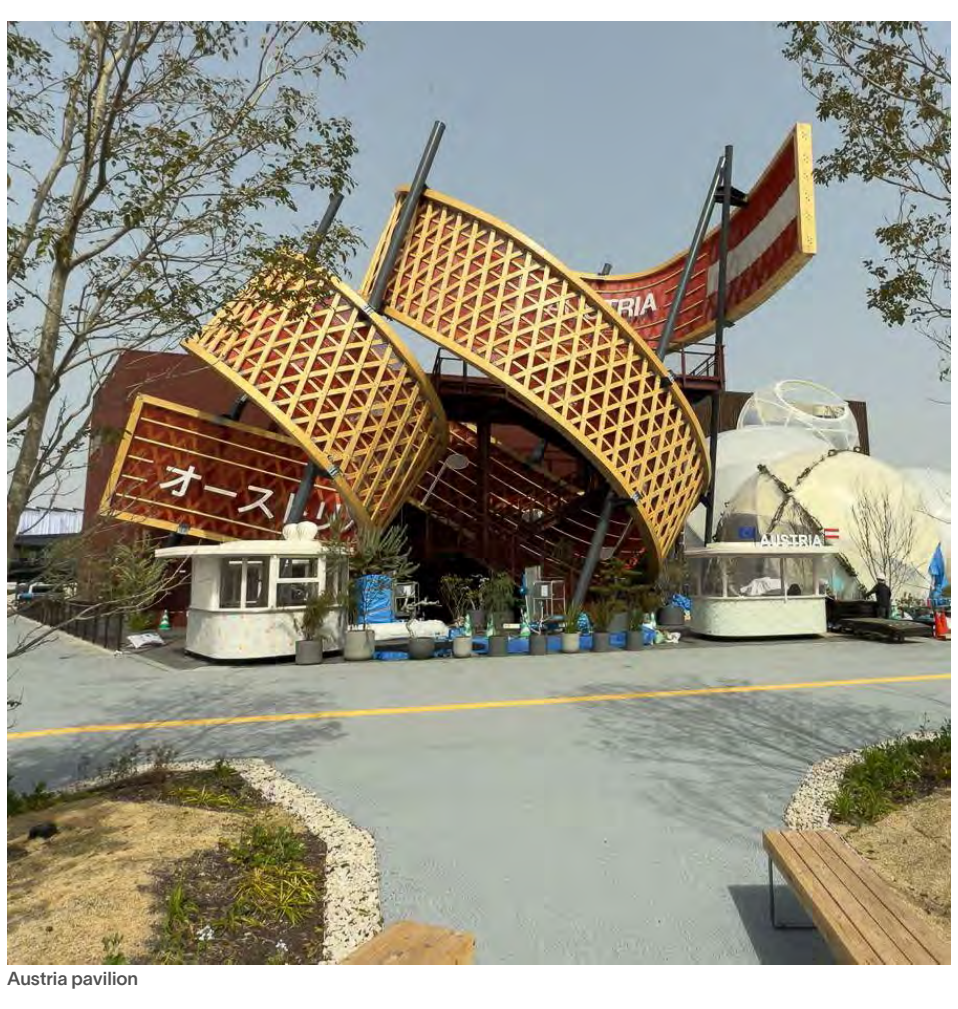
Esquire Japan

州ごとの名物が随時更新されていく屋上のレストラン「イータリー」

細部にまで「リアル（本物）」を追求した空間は多くの来場者を魅了し、行列でなかなかリアルに触れられないという、ジレンマが発生。バーチャルツアー（バーチャル版はこちらから）に参加して、その美学の一端を覗いてみるのもアリだが、やはりおすすめしたいのは、あの空間に身を置いて味わう、現地での体験だ。過去の芸術と未来への想像力をつなぐ「いのちのバトン」を、どうかあなた自身の手で受け取ってほしい。

第2位：オーストリア館

リベラルアーツで未来を「作曲」する旅へ

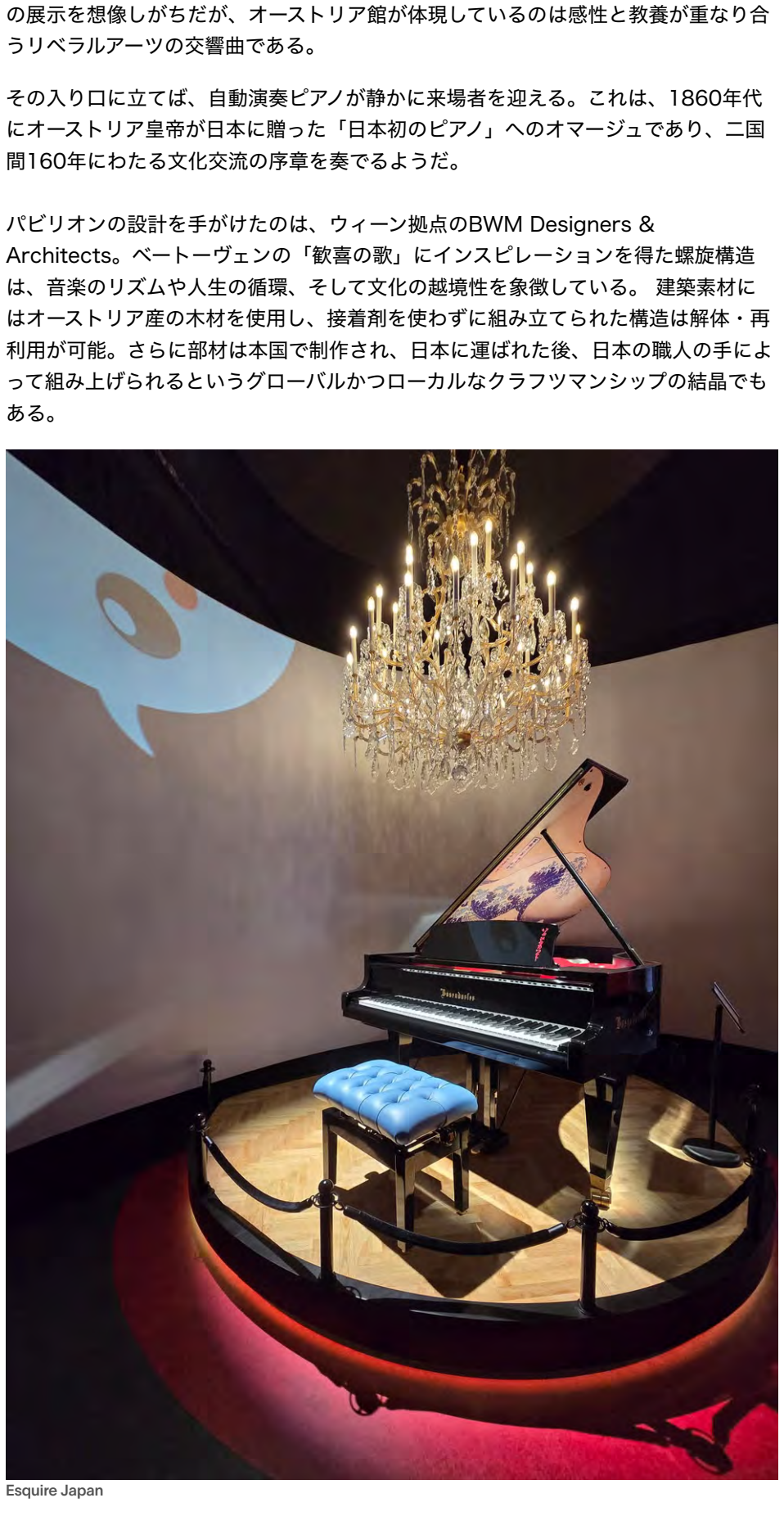


Austria pavilion

「未来を作曲する（Composing the Future）」というテーマから、つい音楽中心の展示を想像しがちだが、オーストリア館が体現しているのは感性と教養が重なり合うリベラルアーツの交響曲である。

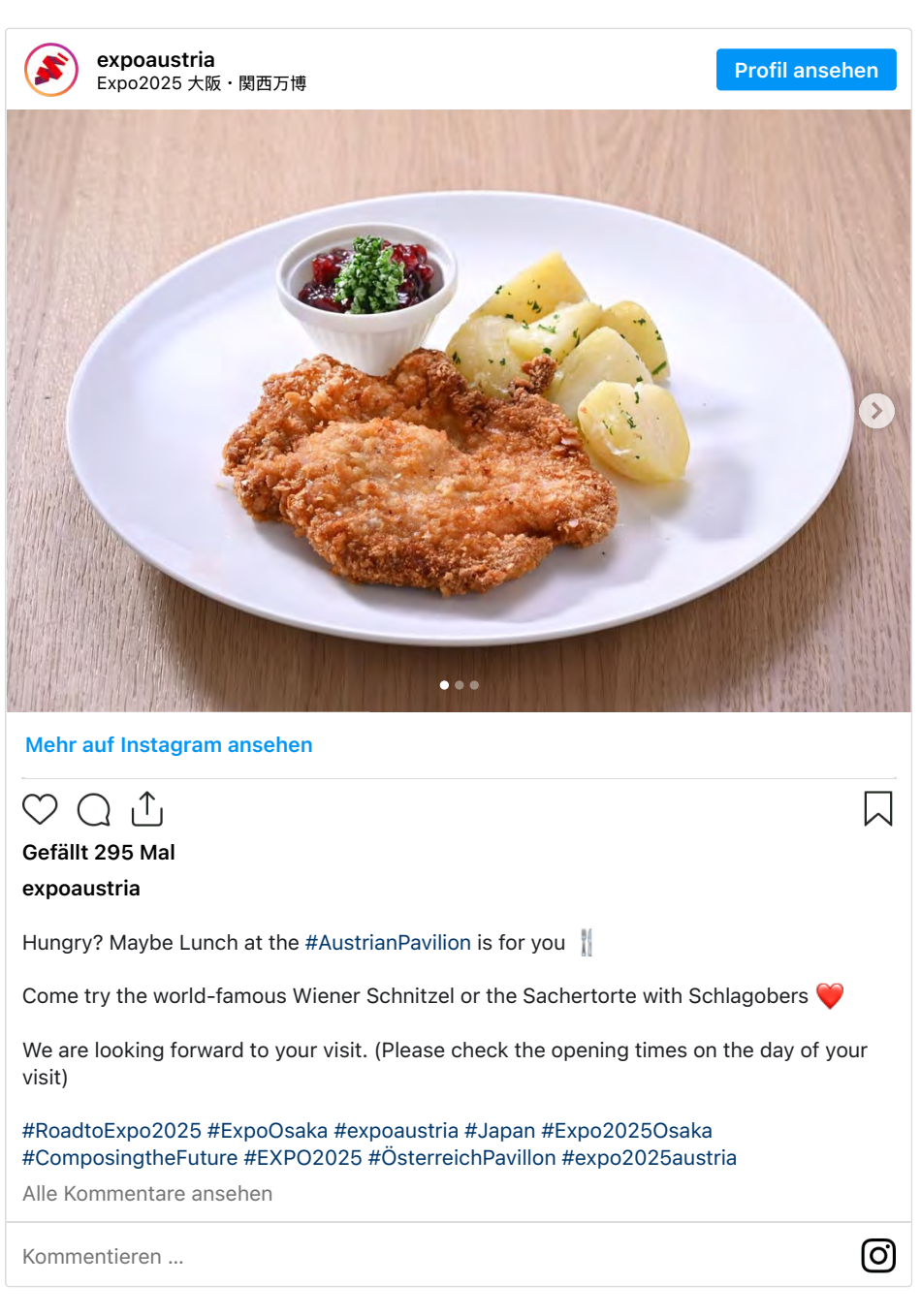
その入り口に立てば、自動演奏ピアノが静かに来場者を迎える。これは、1860年代にオーストリア皇帝が日本に贈った「日本初のピアノ」へのオマージュであり、二国間160年にわたる文化交流の序章を奏でるようだ。

パビリオンの設計を手がけたのは、ウィーン拠点のBWM Designers & Architects。ベートーヴェンの「歓喜の歌」にインスピレーションを得た螺旋構造は、音楽のリズムや人生の循環、そして文化の越境性を象徴している。 建築素材にはオーストリア産の木材を使用し、接着剤を使わずに組み立てられた構造は解体・再利用が可能。さらに部材は本国で制作され、日本に運ばれた後、日本の職人の手によって組み上げられるというグローバルかつローカルなクラフツマンシップの結晶でもある。



Esquire Japan

内部空間は、音と光と香りが調和する、呼吸する森のような世界。来場者が歩くたびに音楽や映像が変化するインタラクティブ構成となっており、展示そのものがひとつの巨大な楽器のようだ。 音楽を入り口に、王室の歴史、科学技術、障がい者支援、日本との文化交流など、さまざまなテーマが段階的に重なっていく構成は、知を「聴き、感じ、歩いて理解する」リベラルアーツの実体化とも言えるだろう。



Gefällt 295 Mal

expoaustria

Hungry? Maybe Lunch at the #AustrianPavilion is for you 🍴

Come try the world-famous Wiener Schnitzel or the Sachertorte with Schlagobers ❤️

We are looking forward to your visit. (Please check the opening times on the day of your visit)

#RoadtoExpo2025 #ExpoOsaka #expoaustria #Japan #Expo2025Osaka #ComposingtheFuture #EXPO2025 #ÖsterreichPavillon #expo2025austria

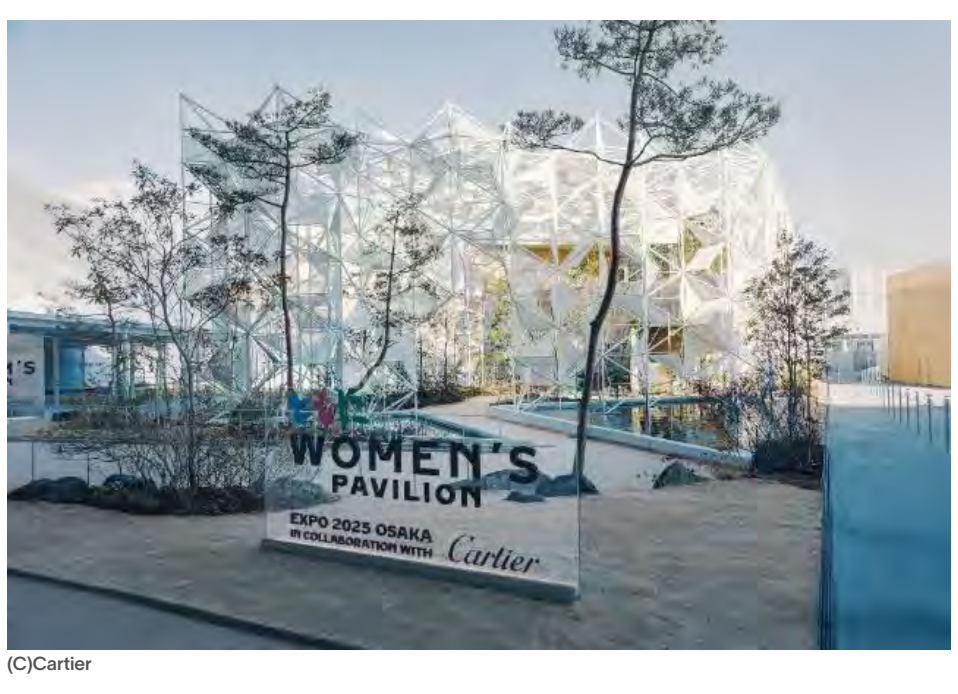
Alle Kommentare ansehen

展示の終盤には、「自分なら、どんな未来を作曲するだろう？」という静かな問いが残される。来場者こそがその楽譜に音を加える番なのだ。

そしてその余韻を携えて向かいたいのが、展望カフェ。隣国の「ソーセージ&ザワークラウト」の先入観をそっと裏切るのが、甘味で魅せるオーストリアの底力。ふわっと軽いのに密度のあるカイザーシュマーレン、そしてザッハトルテの重厚感で胃袋にもフィナーレを。ただし、並んでいる間に交響曲が一巡したという噂もあるため覚悟してのぞむべし！

第3位　ウーマンズ パビリオン（in collaboration with Cartier）

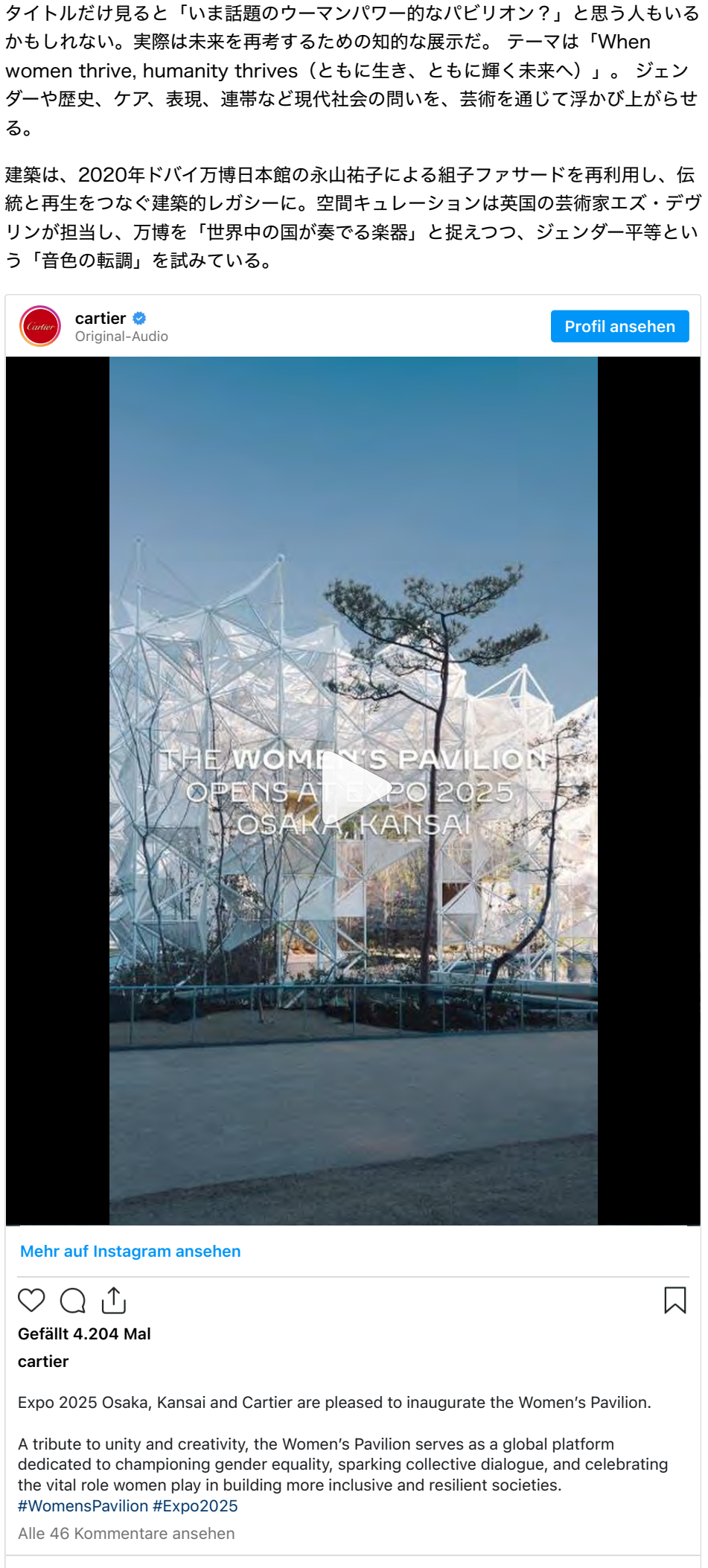
答えのない場所で、見えることとは？



(C)Cartier

タイトルだけ見ると「いま話題のウーマンパワー的なパビリオン？」と思う人もいるかもしれない。実際は未来を再考するための知的な展示だ。 テーマは「When women thrive, humanity thrives（ともに生き、ともに輝く未来へ）」。 ジェンダーや歴史、ケア、表現、連帯など現代社会の問いを、芸術を通じて浮かび上がらせる。

建築は、2020年ドバイ万博日本館の永山祐子による組子ファサードを再利用し、伝統と再生をつなぐ建築的レガシーに。空間キュレーションは英国の芸術家エズ・デヴリンが担当し、万博を「世界中の国が奏でる楽器」と捉えつつ、ジェンダー平等という「音色の転調」を試みている。


cartier
Original-Audio
Profil ansehen
THE WOMEN'S PAVILION OPENS AT EXPO 2025 OSAKA, KANSAI
Mehr auf Instagram ansehen
Kommentieren ...

Gefällt 4.204 Mal

cartier

Expo 2025 Osaka, Kansai and Cartier are pleased to inaugurate the Women's Pavilion.

A tribute to unity and creativity, the Women's Pavilion serves as a global platform dedicated to championing gender equality, sparking collective dialogue, and celebrating the vital role women play in building more inclusive and resilient societies.
#WomensPavilion #Expo2025

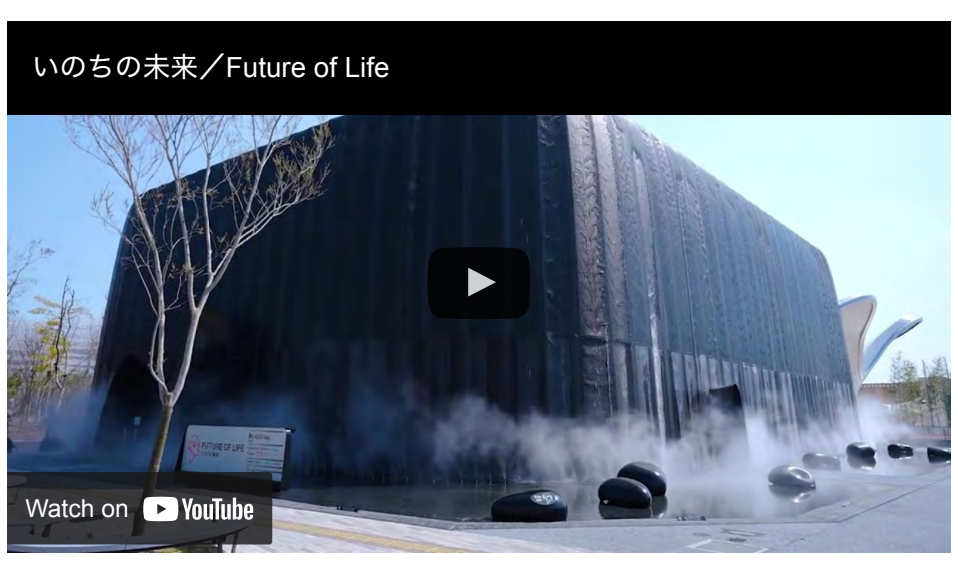
Alle 46 Kommentare ansehen

第1章「スリー ウィメン」では、吉本ばななや河瀬直美の表現を通じて、異なる背景を持つ3人の女性の声を紹介。第2章「スリー パスウェイズ」では、そのひとりの人生を追体験しながら、個人の物語から普遍的な社会課題へと導く構成に。「ユア ハンド」や「パズル ボックス」など、ジェンダーやケアを探る空間も展開され、黒柳徹子ら多様な声が視点の揺らぎを生む。2階には150以上のイベントと四季の庭園が広がり、制服は世界的ブランドsacaiの阿部千登勢がデザイン。カルティエは文化的当事者として本展示に深く関わっている。

芸術と社会、個人と公共。その交差点に静かに佇むウーマンズ パビリオン。 出口でふとよぎるのは、「これは女性への展示ではなく、社会そのものへの問いだったのかもしれない」という感覚。ここには正解はなく、当たり前だった視点がじわじわとずれていく。 その違和感こそが、この展示が差し出す最も深い余白なのかもしれない。

第4位　シグネチャーパビリオン「いのちの未来」（英：Signature Pavilion – The Future of Life）

あなたのいのちは、どこからどこまでですか？



ロボット工学者・石黒浩がプロデュースしたこのパビリオンは、単なる先端技術の展示ではない。 問いかけてくるのは、「人間とは何か？」「感覚とはどこまで拡張されうるのか？」という根源的なテーマ。テクノロジーで思索を促す、「哲学する空間」である。

館内体験の中核には、協賛の京セラが提供する骨伝導イヤホンやバイタルセンシング、ローカル5Gといった身体と空間をつなぐ技術がある。 さらに、自然光に極めて近いLED照明「CERAPHIC®」が照らし出すのは、科学と感性の狭間に漂う「いのち」の気配だ。

入り口で迎えてくれるのは、スクリーンに現れるアバターたち。 その多くは遠隔操作されており、病院に通う患者や、社会と距離をとる人々が「もうひとつの身体」としてこの空間とつながっている。 テクノロジーが孤立の向こう側で、人との関係性をひらいていく。

館内でガイドを務めるのは未来型スマートフォン。だがここで問われるのは、「すごさ」ではない。 むしろ「人間中心主義という前提を、未来にそのまま持ち込んでいいのか？」という違和感が、来場者の思考に入り込んでくる。

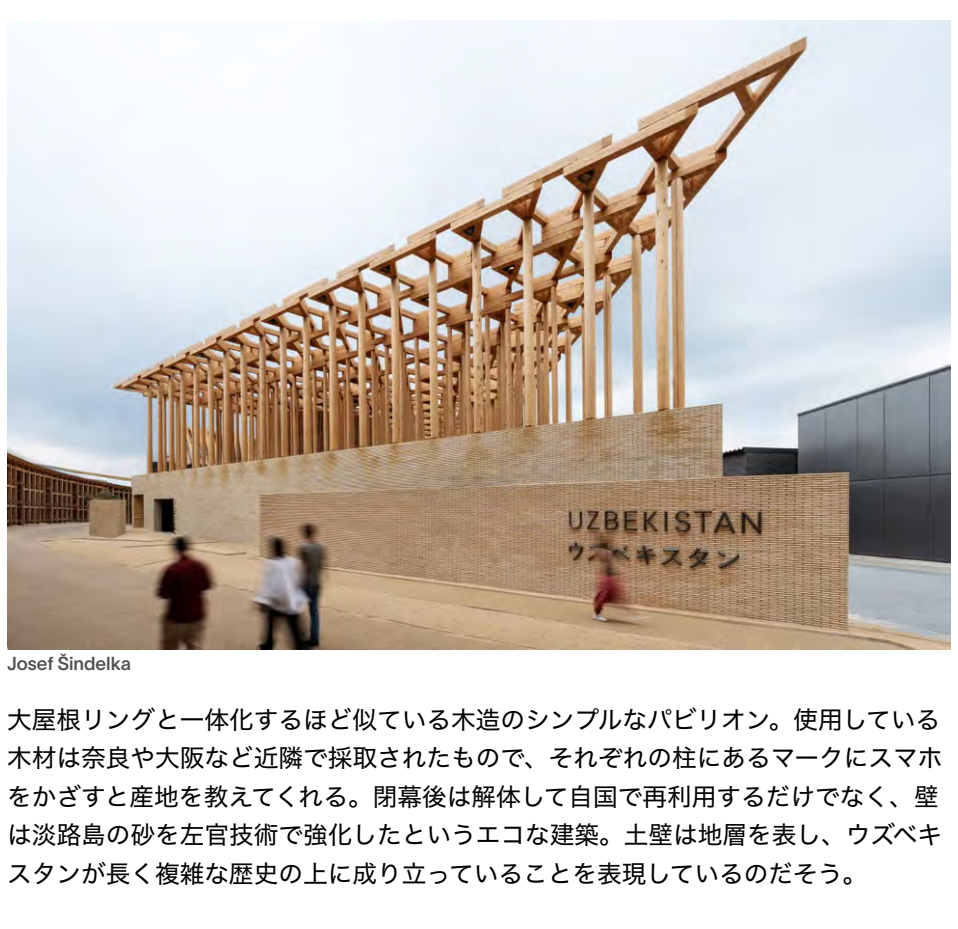
展示は、アンドロイドたちが生活する空間や架空のテレビ番組、そして「50年後の家族」のストーリーへと展開していく。そこに浮かび上がる問いは、「死を迎えるのか？ それともアンドロイドに心を託して「永遠」を選ぶのか？」という究極の選択だ。

さらに、パビリオン内に繰り返し現れる問いがある。「あなたのいのちは、どこからどこまでですか？」 その問いの奥にあるのは、「存在とは何か」「いのちは誰のものか」という、テクノロジーでは答えきれない本質的な疑問である。

そして最後にふと振り返る。 未来とは、まばゆいガジェットではなく、「思考する感覚」こそが拡張されるべき領域なのではないか。そんな気づきが来場者に残される。

第5位　ウズベキスタン館

「知の庭」で知られざる中央アジアの先進性を体験



Josef Šindelka

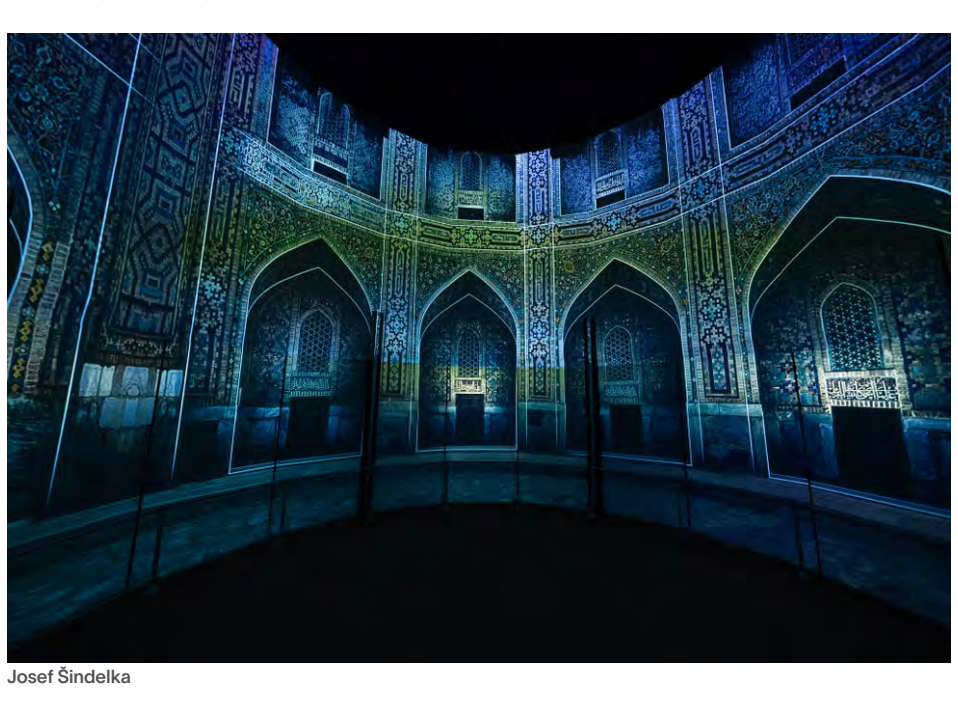
大屋根リングと一体化するほど似ている木造のシンプルなパビリオン。使用している木材は奈良や大阪など近隣で採取されたもので、それぞれの柱にあるマークにスマホをかざすと産地を教えてくれる。閉幕後は解体して自国で再利用するだけでなく、壁は淡路島の砂を左官技術で強化したというエコな建築。土壁は地層を表し、ウズベキスタンが長く複雑な歴史の上に成り立っていることを表現しているのだそう。

館内では、ここ5年の年間出生数が90万を超え、人口の6割が30歳以下。いっぽうでこれまで頼りにしてきた天然資源に限界があることも見えてきたジレンマに陥っている国で、国を繁栄させるのにいかに「知」が重要かをわかりやすく伝えている。

Josef Šindelka

サクサウールの植樹による枯れたアラル海の緑化活動や、2030年までに再生可能エネルギー率54%を目指すという挑戦など、すべてにおいて重要なのは「知」であるとする。文化活動や教育によって、これまで先人が培ってきたにもかかわらず無視してきたものをすべて洗い出す作業を追っていく。

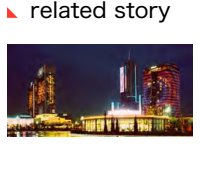
翻って実利が最優先され、知性や教養や文化政策が軽視されるようになっている“先進国”は、果たして“先進”しているのかどうか考えさせられる。全国でもこのウズベキスタン館でしか一般公開していないクラスのエレベーター式シアター（観客席が動く）で不思議な映像体験をした先に広がる木柱の神殿で、哲学的思想にふけることができる（人による）。



Josef Šindelka

ちなみに出口近くにあるお土産コーナーでひっそりと売られている刺繍ハサミ。彫金が施され鳥の形をしているがこれが人気だそうで、入荷次第すぐに売り切れてしまうそう。在庫があったらラッキーなので、購入しておくことをおススメする。

related story

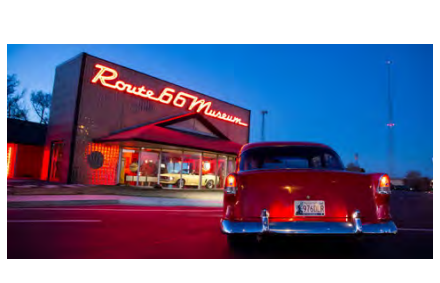


中央アジア・ウズベキスタンの今を取材。文化資本主義を進める女性たちの力

PROMOTION

フェラーリを腕元に——リシャール・ミルと跳ね馬が共鳴した、“レガシーと思想”の共創

アメリカ東海岸を巡る、夏の終わりのロードトリップ

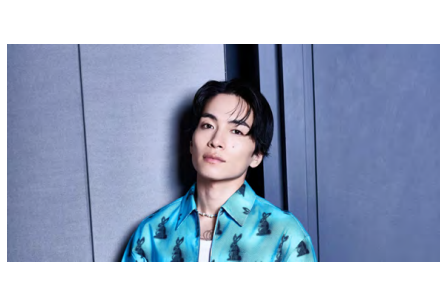


アメリカを知る究極の冒険を求めて、ルート66へ

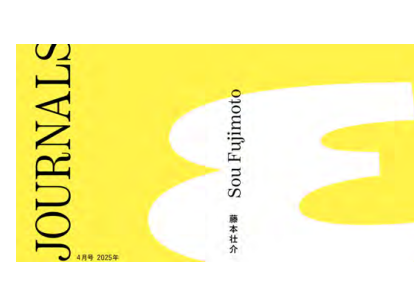
READ MORE

こんな気分？
多様性をつなぐ

AIと宗教が交差する時——終末ファシズム・終末論ファシズム（End Time F…



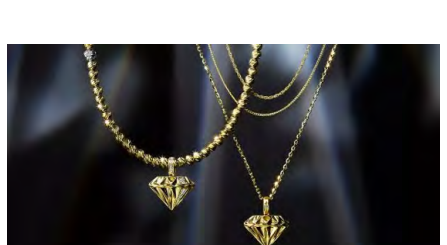
アーティストが社会的・政治的発言をする意味　SIRUP x 辻愛沙子対談【連載第2回…



【藤本壮介コラム】ひとつの／たくさんの響き［第1回］

人類の歴史を変えた「7大・火山噴火」 ローマ帝国の崩壊からアトランティス伝説まで…

JOURNALS
Sou Fujimoto



AnotherADdress
200ブランドから自由に選んでレンタルできる